

特集 白

白の宇宙誌

The Cosmology of White

城 一夫 Kazuo Jo 共立女子短期大学 Kyoritsu Women's Junior College

Ⅰ. 宇宙を構成する色としての白

東西を問わず、「白」は人類の最初から存在していた色である。アメリカの人類学者バーリンとケイが「色彩の基礎用語」で明らかにしたように、白は黒とともに、人類が最初に知覚し、命名した色名の一つである。多分、原初的人类は「光」と「闇」、「昼」と「夜」、そして「明」と「暗」を認識し、次いで「白」と「黒」という色を認識するようになったと考えられる。次いでバーリンとケイは、原初的人类は赤、黄、緑（緑、黄）、青の順で、色を認識すると説いているが、私たちは、彼らが自然界に存在する色を順次、色として認識し、色名を与えたのではないかと推察することができる。

呪術的な原始社会では、色彩は宇宙観を形成する重要なコード体系であり、神話世界の天地、方位、吉兆などを表した。当然、この色彩コードは、種族や文化によって、異なっており、その記号的役割もさまざまである。例えば、西洋文化圏の規範となったユダヤ教（キリスト教）では、青を中天の色とし、北は黒、南は灰、東は赤、西は白に配当したが、中国の陰陽五行説では、中天は黄、北は黒、南は赤、東は青、西は白に位置づけられている。またわが国の神話では、天頂に白を配し、地下は黒、東は青、西は赤に位置づけている。一方、仏教（密教）の曼陀羅の世界では、胎藏曼陀羅では、中央の大日如来を基点として、中央に白、

北に黒、南に黄、東に赤、西に青としており、金剛界曼陀羅では中天は白、北に黒、南に黄、東に青、西は赤になっている。いづれの両界曼陀羅でも、中央の色は白である。

色彩の宇宙観

文化・宗教種類	中天	北	南	東	西
ユダヤ教（キリスト教）	青	黒	灰	赤	白
陰陽五行説	黄	黒	赤	青	白
日本神話	白	地＝黒		青	赤
胎藏曼陀羅	白	黒	黄	赤	青
金剛界曼陀羅	白	黒	黄	青	赤

以上のように、各文化圏では、それぞれの色彩宇宙観は異なっているものの、共通しているのは、白、黒を中心として黄、赤、青、灰であり、その中心に白、黒があることである。西洋の規範であるキリスト教、東洋の規範である陰陽五行説では、ともに白は光輝く太陽が沈む「西」に配されており、死の世界、闇の世界、喪の色を象徴している。また仏教では、白は大日如来は名前の通り日輪の光輝く身体の色であり、曼陀羅の中天の色である。つまり、古代社会では、常に「白」は太陽の運行の軌道上にある「中天の光」の色

であり、昇の日、沈む日の光の色である。

Ⅱ. 西洋文化における「白」

(1) 「光」の色としての白

西洋文明は古代ギリシャ文明とキリスト教文明を二つの規範として成立している。古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、全ての色は「光」と「闇」の混合で生ずると述べ、白を根源的な色として配した。また古代ギリシャの「創世記」といふべき「神統記」では神は女の誕生に際して、「輝く眼をしたアテナ神は、彼女に帯をつけてやり、白銀色の衣で身をよそわせ」とあり、白は神に属する色であった。白はギリシャの神々の色であり、豊穡の女神ケレスに似合う色であった。以後、古代ギリシャの伝統は、この白によって表現され、ギリシャの神々の神殿は白亜の大理石で作られ、神々は白の衣裳で表現された。

一方、キリスト教でも、新約聖書に「彼らの前で、イエスの姿が変わり、その顔は日のように輝きその衣は、光のように白くなった」(マタイ伝 17:2)として神は光のように白い衣を着ており、と日のように輝いていると記述し、白を「光=神」の色として描写している。また神の使いである天使たちも白い衣裳を着た姿で描かれており、歴史を通じて神、及び神の代理人たちは、白い衣裳を着用している。今日でも神の代理人であるローマ法王の衣裳は白であり、キリスト教会では白は洗礼、初聖体やクリスマス、復活祭、キリスト昇天祭の色として用いられている。

(2) 神聖な存在としての白

「光」の色、「神」の色である「白」は、当然のことながら霊的な存在、神聖な存在としての「白」として使用される。古代ギリシャの天馬ペガサスは白い翼をもった「白馬」であり、「白い一角獣」は処女の前では跪く聖獣であった。また「白貂」は真っ白い毛皮に汚点がつくと、自ら恥じて死ぬと信じられた。さらにロシアの「白蛇」は秘宝を守護神であり、ローマ時代には、ドイツでは「白馬」は神に捧げられる神聖な動物であった。その他、神の属性をもつ動物は、洪水の終わりを告げた「白い鳩」を始めとして、「白い雄牛」「白い羊」がしばしば用いられている。一方、白い動物は、異次元の世界に人間を誘う動物の役を担っており、「聖杯物語」では「白い牡鹿」は騎士を冒険の旅へ誘い、「白兔」はアリスを「不思議な国」へ誘うのである。有名なアーネスト・ヘミングウェイの小説

「白鯨」、ジャック・ロンドンの小説「白い牙」も白い色をした動物たちの数奇な運命を描いている。

(3) 多彩な紋章の1色としての白

中世キリスト教騎士道時代には、紋章は家柄、家系などを象徴する重要な機能を果たしたが、ここでは色彩が重要な役割を担った。西洋の紋章色彩は、日本の白黒のみによって表現された家紋と異なり、さまざまな色彩が用いられたが、その色彩の使用法には厳格な色の規制があった。それによれば、①金属色(金、銀)、②赤、緑、青、紫、黒、橙、赤紫を含む7色の有彩色、そして③アーミンとヴェアの毛皮(白地に黒の斑点)2種などと決まっており、金属色のみ、また有彩色のみの使用は禁じられた。しかし、金、銀には代用色が認められ、金の代用は黄、銀の代用は白であった。

西洋の紋章は、基本的には多彩色(ポリクロミー)であり、白はその一翼を担う役割に過ぎなかった。中世フランス王朝は、白を王室の色とし、特に1589年にブルボン王朝が誕生してから有名になった。そのブルボン王朝の紋章は、白いフリュー・ド・リュス(百合の花)である。また英国では、ランカスター家の赤に対してヨーク家の白バラの象徴色となり、後のチューダー・ローズの芯色となった。

(4) プロテスタンティズムによる白

キリストの十字架上で流した「赤い血」をシンボルとするキリスト教は、西洋社会に多彩なポリクロミーの色彩空間を創造した。しかし、16世紀初頭に誕生したプロテスタンティズム(宗教革命)は、このキリスト教色彩象徴主義を失墜させ、教会教義のみならず、市民社会の日常生活から、色彩を追放し、白、灰、黒の無彩色の世界をもたらした。例えば1649年に始まる清教徒革命による芸術検閲官の布告以後、従来赤い衣服、青の外套を着ていた聖母マリアは白い衣服に変わった。このプロテスタントの教義はやがて日常生活の大部分——住居、美術、衣服——に大いに影響を与え、赤、橙、黄などの派手な色彩を追放することに大いに貢献した。このプロテスタンティズムは、アメリカに渡った清教徒たち、特にクエーカー教徒やアーミッシュなどに受け継がれ、彼らの灰色のドレスや黒いスーツに白いシャツなどの衣服となり、やがて19世紀には男性の衣服から色彩を奪うこととなった。この清教徒たちの色彩否定の精神は、今日の紳士淑女の黒のスーツ、白いシャツやブラウスなどの伝統に引き継

がれていく。

(5) 平等、平和の象徴としての白

白は平等、平和のシンボルであった。海賊バイキングが「平和の使」として、海岸に近づくときは、白色の楯を掲げた。古来、戦場で敵意のないことを示すときには、長柄の白旗を掲げる習慣があり、その後、白の腕章や白旗は、休戦、降伏、捕獲の意味をもつようになった。1889年、フランス市民は青、白、赤のトリコロール（三色旗）を旗印として、フランス革命に蜂起した。この3色旗の青は自由、白は平等、赤は博愛のシンボルであった。革命以前、フランス国旗は、白地に金色の百合を配したものであったが、革命時、国民軍は王室の白、パリの紋章の赤と青で三色帽を作ったが、後にこれがフランス国旗となり、中でも白は平等を表すシンボルとなった。以後、各国で三色旗は採用されたが、イタリアの緑、白、赤の三色旗は、美しい国土、正義、愛国心を象徴しており、またアイルランドの三色旗の緑はカトリック、白は平和、オレンジはプロテスタントを象徴している。

(6) 美の条件としての白化粧

肌の色の白い西洋人が、美白化粧を好むことは当然のことであった。特にエリザベスI世時代、白化粧が流行したため、エリザベス女王は、露わにした肌に流行の頬紅と白粉をつけていたが、年をとるに従って、それらをますます塗りたくった。現在、私たちが見るエリザベス女王の肖像画の顔は、厚い鉛白の化粧で、まるで能面のような無表情の顔になっている。「メーキャップの歴史」にはある姉妹の会話を掲載し、「色白でさっぱりして、きれいにすっきりしているのはなんて素晴らしいことでしょう」と述べている。また「銀色の鉛白を 汝 乙女よ 先ず用意せよ 天然の白粉は この上なく美しく輝く」とあり、女性が白粉を塗ること表しているのである。さらに歯に関しても白く磨くことを奨励し、19世紀のエチケツ集には、毎日数回歯を磨くことを奨励している。

(7) 白い東洋磁器への憧憬

西洋では有史以来、東洋で産するような素地から白い磁器を作ることが出来なかった。古代ギリシャの黒絵式、赤絵式を始めとして、中世の橙、黄、緑、青を基調としたマジョリカ陶器に至るまで、白の釉薬をかけて白い陶器を作っていた。彼らは中国の景德鎮、日

本の伊万里からもたらされる白い磁器に憧れ、各国の王侯貴族は宮殿内に東洋の白い磁器を飾る「陶磁器の間」を作り、その白磁に限りない憧憬を懷いた。17世紀末、ドイツのザクセン州のアウグスタス豪胆王は、自国で白い磁器を生産することを思いつき、錬金術師のヨハン・ベッドガーに命じて、白い磁器の国内生産に乗り出した。ベッドガーは、14年間に及ぶ悪闘苦戦の結果、やっとドイツのマイセンの地で、西洋最初の白磁の創生に成功した。以後、西洋にはこの白磁生産の秘法が広まり、フランスのセーブル窯、デンマークのロイヤル・コペンハーゲン窯、イタリアのリチャード・ジノリ窯、イギリスのロイヤル・ダルトン窯、ミントン窯など、世界各地に広まった。このことはいかに西洋人たちが、「白」い磁器に対する強い憧れをもっていたかを物語っている。

Ⅲ. 東洋・日本の白

(1) 神の色としての白

日本において、白は神の色であった。古代日本の歴史を記述した「古事記」「日本書紀」「風土記」には赤、白、青、黒の4色がしばしば象徴的に用いられている。その中で、特に重要な色は「赤」であり、「生命」のシンボルである。「古事記」にはイザナキ、イザナミの結婚の後、イザナミは火の神カグツチを生んで死んでしまうが、怒ったイザナキがカグツチを切り殺すと、「血」が四方に飛び散り、その結果、さまざまな神が生まれたとあり、「赤い血」は生命の象徴であることを物語っている。

この「赤」の対に用いられるのが「白」であり、白は神の化身あるいは神の使いの動物の色として用いられる。ヤマトタケルが伊吹山で白い猪に殺された後、空に「白鳥」となって飛翔していき、イナバの兎は、オキの島にいたときは「黒」色をしていたが、鯨に皮を剥がされて「赤」い肌となり、オオクニヌシの手当てによって「白」兎に変わっていく。この「黒」から「赤」、そして「白」への移行は、死と隣あわせの状態の「黒」から、出血を伴う「赤」を経て、「天」を象徴する「白」への移行、及び「生命の再生」を象徴しているといわれている。いずれにせよ、神々の住み給う山は「白山」「白神山」であり、神々の社は「白木」の明神造りであり、注連縄に捧げられるシデ、神々が降臨する「白蓋」、人々の穢れを払うのは「御幣」といい、神々の属性である「白蛇」「白馬」「白猿」「白象」「白狐」「白鷺」などの白い動物、そして神々に捧

げられる「白米」「白酒」「白い団子」など、神に関連したものには「白」が用いられている。

(2) ハレの色としての白

白は穢れを払う聖なる色、純粹・無垢な色であるところから、人の生死に係わる大事な時に用いられた。平安時代に、公卿や武士の家では、お産に際して、妊婦は浄衣であるところの白衣を着るとともに、女房や侍女たちも白い衣裳を身につけ、白い屏風、白い畳の縁、そして白い家具などを用いて、誕生に際して清めの祈願を行った。当然、誕生した子供には白い産着を着せ、その枕元には邪気を払う祈願を込めて、白い練絹を巻いた「天児」をおく風習があった。

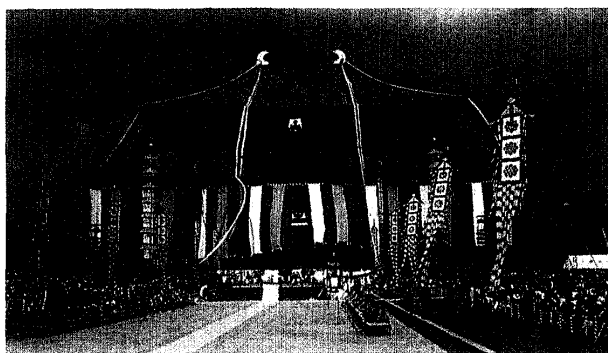
また「白」には弔事の意味もあった。中国に始まる陰陽道では白は「入」と「二」を合わせた会意文字であり、「入」は「日が入る」に通ずるところから「陰」を意味し、また「二」も「陰」の数字なので、「二重の陰」「陰気の極」として「喪事」を意味した。従って、古代中国、古代日本では、喪事の時は無染色の麻の素服（即ち「白」の衣服）を用いた。その伝統は一時「灰色」の喪服に代替されるが、再び近世になると、「白」は喪服として、死出の旅路へ赴く時の衣服として用いられるようになる。中国では、古くから白衣冠、白衫などの白の喪服、素車白馬（現在の霊柩車）などの言葉があり、相当古くから白が弔事に用いられていたことが分かる。わが国でも武士の切腹の際の「白装束」や巡礼の白装束などは、その現れである。その他、弔事に関連するものとして、白一色の不祝儀の香典袋、白い造花、白幕などがある。



「エリザベス I 世の肖像画」白の厚化粧



ヨハン・ベッドガーが作った
西洋最初の白磁



東大寺千二百年法要の五色の幕
(青、赤、黄、白、黒)



モーリス・ベジャール演出
「ザ・カブキ」切腹の場面の白装束

(3) 白衣民族としての韓国

韓国は古来から「白衣民族」と呼ばれているほど、伝統的に「白」を基調としてきた。韓国の古書「隋書」新羅伝には、「服色は素（白）を尊ぶ」とあり、また「宋史」高麗伝にも、「士女の服素（しろ）を尊ぶ」と書いてある。さらに「高麗図経」には「臣聞く三韓の衣服の制染色を聞かず」と記されている。一方、「星湖塞説」にも「高麗忠烈王元年（1275年）、太史局言う。東方は木に属す。色は当に青を尊ぶべし。しかるに国俗白を尊ぶ。これ木の金に制せらるるの象なり。請う白衣を禁ぜんと。これに従う」と記されているという。これは東方（陰陽五行説による青の方向）に当たる高麗国が西方（白）のモンゴルに支配されている現状を憂い、せめて服色だけでも青に変えようとしたささやかな抵抗を表している。この時、全韓国民が彼らにとって喪服の色である「白」を着けた名残とも言われている。以来韓国では、白衣尊重の風潮が始まり、女子学生の制服などとして、それが今日まで続いている。

また慶事、弔事の折に白衣を着たばかりではなく、それに伴い、食事に際しても白い色の食物を供した。例えば、誕生日には、若菜の汁に白い御飯、結婚式には、白い麺類、出産のときには白子餅を食べたが、百日経つと、白雪餅を百片ほど近所に配った。なお近代になると、この白衣尊重は減少し、慶事、弔事にも西洋的な色彩を用いるようになり、この伝統は崩れつつある。

(4) 赤化粧から白化粧へ

古代日本では赤い顔料を化粧として用い、顔に赤化粧を施すことが古くから行われていた。古代社会では赤は魔除の色であり、埴輪などの顔は赤く彩色され、さまざまな隈取りがされている。この風習は平安時代まで続くが、春日大社や正倉院の舞楽面に赤を差したものがあつた。また今日でも祭礼で稚児さん役の男子の頬を赤くする風習が残っている。

中国では、古くから色の白いことが美人の条件とされ、「膚如凝脂」などといい、「凝油」とは白く鮮やかな豚の油のように白という意味で、中国ではこのような白い肌の女性を愛でた。この中国の白化粧の風習が平安時代にわが国にも導入され、白粉が一般的に用いられるようになったのである。顔の白いことが美の基準とされ、「源氏物語」の光源氏の「光」も薫大将の「薫」も白いことを意味しており、美白は美男・美

女の「美」そのものを表すようになった。歌舞伎にみる白塗りの二枚目、お姫さまなど、白塗りの化粧であり、以来、「色の白いのは7難隠す」といわれるほどに、「白」は顔色の美学となった。なお、歯に関しては、古墳時代より、虫歯防止の対策として、「お歯黒」が行われていたが、この風習は平安貴族や平家の武将の風習となり、江戸時代には既婚女性の象徴として用いられ、明治時代に西洋の「歯白」の化粧法が入ってくるまで続けられた。

(5) 白黒の世界の日本の家紋

西洋の紋章が厳格な色彩の使用規則があつたのに対して、わが国の家紋はその大部分が黒地に白、白地に黒のモノクロミーで構成されている。例外として土岐氏の水色桔梗紋、小出氏の水色三階松紋があるのみである。これらもごく淡い水色であつたから、いわばモノクロミーの一種と考えて差し支えあるまい。

元来、紋章や家紋は戦場における味方また敵との確認作業の中から生まれてきたものである。しかし、西洋と東洋の戦場の仕方で、さほど差異が生ずると思えないから、これは洋の東西のもつ色彩観の相違からくるものではあるまいか。

(6) 西洋を魅了した白い磁器

「白磁」とは、カオリナイトを含む白色の陶石で素地を作り、透明釉薬をかけ、1250度以上で焼成した素地から白い磁器のことである。東洋、特に中国では6世紀頃には河南省安陽県付近から、既に白磁の出土品が生まれているので、相当、古くから用いられていたと思われる。以後、10世紀頃、北宋の定窯では牙白色の高貴な名品を産出し、同時に江西の景德鎮窯では青白磁色の絶妙な傑作が作り出されて、遠く東アフリカにまで輸出された。一方、韓国でも、既に9世紀頃、仁川市で陶胎で白い磁器が焼かれ、13世紀李王朝は、明の宗主と仰いだために、明官窯白磁の流れを汲む典雅な李朝白磁を作り上げた。

また、わが国では、16世紀末の文禄・慶長の役のとき、韓国から陶工李参平が来日し、九州有田の地で白磁を焼いたのが最初といわれている。間もなく、名工酒井田柿右衛門らの名工が輩出し、伊万里、鍋島などは、素地から白い世界的な色絵磁器の産地として、数々の名品を西洋に輸出することになる。